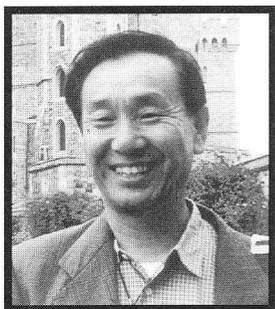


斉藤 憲一郎君の逝去を悼む

昭和46年卒 吉岡利春



平成14年6月25日 病没
ご遺族 妻、美喜子 様

本年2月1日、私に男の初孫が誕生しました。斉藤憲一郎君には既に孫が2人いました。

平成14年秋、彼の20数時間に及ぶ大手術の前日、私が京大病院へ、妻と2人でお見舞いに行き、私は斉藤に「よくこんな大手術を決心したな。」と言ったら、「孫のために手術を受けるんや、孫が生きがいや。」と応えました。

私は、まだ孫の顔を見ていないし、抱っこもしていません。定年退職間近の私にとって、孫の出現は、今後の人生に多大な影響を及ぼす予感がしています。その名前のない孫に、抱っこしてあやしなげに言ってやります。

「おじいちゃんは、空が大好きでねえ、京都の同志社大学で航空部というクラブに入ったんだよ。グライダーでかっこ良く大空を自由に飛べると思ってね。富山空港の初合宿、思い出すなあ。おじいちゃん、軍隊に入ったかと思ったよ。軍隊ってわかんないだろうけど、要するに、無茶苦茶でひどかったってこと。1年生10数人一緒に入部したけど、あっという間に10人になっちゃった。残った10人は大変仲良くね。悲しいことに、おじいちゃんが大学4年生のとき、仲良しの1人、山田

達男が乗ったグライダーが落ちこちて、死んでしまったの」。

「孫や、死ぬって人間にとって、とてもつらいことなんだよ。仲良し10人のうち、卒業した後も、おじいちゃんと同じ会社、ゼネラル石油に入った人がいたんだ。その仲良しは斉藤憲一郎とってね。斉藤は、去年6月死んじゃったの。おじいちゃんとは、38年間も仲良しだったので、大変悲しい思いをしたんだよ。本当につらかった」。

「そうかそうか、おじいちゃんの悲しい話より、もっと航空部の話をしてもらいたいかな。よしよし」。

「あのね、グライダーは、すぐに1人では飛べないんだよ。上手に飛べるようになるまで、操縦席の前に1年生が座り、4年生の教官が後に座って、グライダーの操縦を厳しく教えてくれたの。孫や、お前も生きて行く上で、厳しき重要なんだよ。おやっ、何のことが解らないか」。

「初めて1人で飛ぶのを、初ソロと言うんだけど、緊張した中で、教わった教官や、仲間に見守られながら飛行し、無事着地した瞬間、ほっとし、次にスカッとしたことを、おじいちゃんによく覚えているよ。仲良し10人のうち、斉藤、山田が早く初ソロに飛び立ち、くやしいけど、おじいちゃんはちょっと遅れちゃった」。

「人間は、死んだら天国へ行くとされているけど、初ソロは、グライダーに乗る人にとって、生涯1回こっきり、人間の死も1回こっきりなんだ。仲良し10人のうち、斉藤・山田が、航空部の仲間や、親しかった人達に見守られ、天国へ早く初ソロしちゃった。不思議だねー」。

「おじいちゃんも、今度の初ソロは、お前や斉藤・山田にも見守られながら、悠然と滑翔して見せるからね。早く大きくなれよ。よし、よし。」